

卒業生と連携強化が重要

「薬学部の深耕考えたい」



京都薬大 大木曾理事長

京都薬科大学の新理事長に就任した大木曾誠一氏は、本紙の取材に応じ、「卒業生を重要な財産と捉え、活用や連携を考えたい」と語った。京都薬大は、私学の伝統校として業界の多方面に毎年300人以上の卒業生を輩出している。大木曾氏は、卒後リカレント教育の受講生や講師、就職先の多様化を支援する存在として卒業生との連携強化が大学の発展に重要と指摘。ヘルスケア企業で事業戦略に関わった経験から、「大学経営の方向性として、薬学部を深耕することを考えたい」と話した。

新設薬学部の増加や少子・中、京都薬大の経営は安定化を背景に、定員割れを起している。6年制薬学科のこす薬系大学が少なくない。定員は360人。以前より志願者数が減少したことは課題だが、現在でも毎年2000人前後の志願者を集める。

今春の薬剤師国家試験を水平展開するか、主事業を深耕するかを考えると、京都薬大では例えば水平展開して医療系学部を増やすのではなく、薬学部をリカレント教育や社会人大学院などで深耕したい」と語る。注目しているのが卒業生との連携だ。「多数の卒業生が多方面で活躍している。この財産を生かさない手はない。リカレント教育を充実させて卒業生に幅広く受講してもらったり、同教育の一端を担ってもらったりすることを考えている」

就職する学生が多く、現在でもバランスは取れている。業界の各方面で働く卒業生とのつながりを強め、今以上に多様な就職先を確保したい考えだ。同窓会組織の京薬会との連携も強化したいという。

大木曾氏は、製薬やヘルスケア領域の企業でキャリアを重ねてきた。そこで得た視点やノウハウを大学経営に落とし込むことが期待されている。

京都薬大卒業後、1982年3月に同大学院薬学研究所修士課程を修了。旧田辺製薬でライセンシングや臨床開発、研究企画、製品戦略などの業務を担当し、合併後の田辺三菱製薬で執行役員事業開発部長に就任した。親会社の三菱ケミカル

ホールディングス執行役員ヘルスケアソリューション室長として事業再編戦略に関わった後、同グループの生命科学インスティテュート社長を約7年間務めた。新たに就いた大学理事長の役割として「経営者の視点でいかにガバナンスを効かすかが求められる」と強調する。「企業経営では倫理、コンプライアンス、安全が重要。その基盤があって初めてビジネスが成立する。大学も同様で、例えば昨今問題になっている研究不正などはあってはならない。企業では当たり前意識が大学にも必要と語る。また、大木曾氏は「大学を運営する教職員の意識も高めたい」と語る。そのため必要なのは、優秀な人材を育成し、社会に輩出することが大学の役割という基本的な価値観の共有だ。価値観や目標を共有できれば、達成に向けた具体的な手段がその次に出てくる。国試の合格率を高めたリ、多様な就職先を確保したり、優秀な人材に入学してもらおう方策を考えるのは手段であって目標ではない。こうした認識や価値観の共有を学内で徹底し、「ダイナミズムを高めて、私学薬学トップの地位を固めていきたい」としている。